# 石巻市 文化財だより

＝田代島特集＝

もくじ


発刊のあいさつ……1
刊行にあたって……2
田代島調査に至るまでの経過…2
仁斗田貝塚の概観……3
金石文・経塚について……5
平塚八太夫文書について……7
田代島の神社仏閣……10
湊草刈山所在古碑群の移転……12


## 廻船手形

仁斗田、平塚ツナ氏宅に所蔵されている廻船手形である。右は縦17センチ・横9・4センチ、左は縦17センチ・横9・9センチの大きさで、同家にある多数の貿易関係文書とともに幕末期の交易廻船資料として貴重である。

## 創刊にあたって

石巻市教育委員会
教育長　近江義雄


近来、国内各地において、あるいは中国やヨーロッパの国々において重要遺跡の発掘調査が活発に行なわれ、それに伴う学術研究が進められるにつれて、古代史の解明に偉大な貢献がもたらされつつあることは、すでにみなさまもご承知のとおりであります。

当市におきましても、文化財保護条例の設置いらい、市内各所に散在する古代の遺跡をはじめ神社、仏閣、民家等の有形文化財や各種民俗資料、郷土芸能その他無形文化財等の調査、収集、研究を推進して参りましたが、その成果、紹介等を広く市民ならびに関係各位にご高覧ご活用いただくため、このたび機関紙「石巻市文化財だより」を発刊することになりました。創刊号は、昨夏、石巻市文化財保護委員各位によって行なわれました田代島の学術調査の概要をとりまとめたものであります。

この機関紙を通じ、市民ならびに関係各位の文化財に対する愛護意識の高揚等認識をさらに深めていただければ幸甚に存じます。今後この機関紙が、石巻市ならびに石巻地方における文化財保護の推進に資することを念じて創刊のごあいさつといたします。

# 文化財だより刊行にあたって

社会教育課長　渡辺正雄

日本書紀「仁徳記」にみえる、「伊寺水門」の地名は、北上河口を擁する石巻の古称であろうといわれていますが、石巻は、遠く古代から近代を通じ、北上川の舟運と海運を利して、一円の中核として発展してきた地域であります。

また、その開放的な地理的条件から、多種多様な、地域文化を構成し得た土地柄であるといえましょう。

市内には、こうした地域の特色を有する幾多の文化財が存在すると思われますが、従来、この種の文化財に関する調査研究は、一部についてのみ行われただけで、その多くは未整理のまま看過されていたのが実情であると思われます。

そうした点から、昨年に調査が行われた、田代島文化財の概要報告を、「石巻市文化財だより」創刊号としてこのたび出版のはこびとなりましたことは、まことに喜ばしい次第であります。

今後、市内に存在する各種文化財の調査、研究が一層進展し、行政においてもこれを活用して有効な文化財保護が促進できるよう、切に期待するものであります。

そして、この機関紙が保護思想の普及また、文化財調査の集約という面から、大きな役割を担うことを願ってやみません。

# 田代島調査に至るまでの経過

社会教育課事務局

昭和47年7月14日に行われた、47年度第2回文化財保護委員会の席上において田代島に存在する仁斗田貝塚の保護に関して、議題の提出があり、①離島に存在する岩礁性貝塚である。②離島という地理的条件から、ほとんど手がつけられておらず、保存が良好である。③従来まで知られている出土物の内容から、学術的に貴重な貝塚と思われる。などの諸点から、今後その保護について、積極的に考慮されるべきことが意見として提出された。ついては、具体的に保護策を施す前段階として、仁斗田貝塚の実際について調査し、その内容、価置について認識する必要があるので、保護委員会としても仁斗田貝塚の現地視察を主体として、田代島に存在する重要な文化財をこの契機に把握しよう、という方向が打ち出された。事務局でも、これを受けて九月の予算補正を待って、以降にこれを実施する方針をかためたのである。

調査は昭和47年11月16日と17日の2日間、以下の5項目にわたって行うはこびとなった。

①仁斗田貝塚
②十三塚
③平塚家所蔵文書
④神社・仏閣（由来、建築）
⑤その他（金石文、民俗など）

調査団の編成は第一期文化財保護委員7名ならびに事務局から随行として社会教育課長外2名が同行した。

当日は、富沢俊夫委員が所用のため欠席されたが、太斎惇、須田義雄、木村敏郎、楠本政助、三宅宗議、佐藤雄一、各委員の出席があり、16日午前8時30分発の船便により一路田代島へと出港したのである。

16日は、仁斗田地区を対象に、稲荷神社、満福寺、仁斗田貝塚、愛宕神社、平塚基氏所蔵文書、平塚ツナ氏所蔵文書、十三塚について調査を行った。翌17日は大泊地区を対象に、鹿島神社、松盛院等の調査を行い、同日午後の船便で全員帰到した。

今回の調査は若干2日間という日程であり、しかも船便の関係から、調査時間に充分な余裕が取れなかったのは残念であるが、田代地区、文化財についての概要把握は一応の成果を修めたものと考えられる。この調査は主に人文分野を中心にしたものであり、動植物、地質、鉱物など自然科学分野が欠落しているが、これらの不備な点については、今後おりを見て再調査を実施し、資料集積をはかりたいと考えている。

以下の報告は、これら田代地区文化財についての調査概略であり、これにより同地区の文化財内容の一端を少しでも多くの方々に理解いただければ幸いに存じます。

なおこの調査の推行にあたり、終始、御協力を賜った第一期文化財保護委員各位、また調査に先立って、種々の手配をわずらわした、阿部久氏、調査中、欠けがえのない案内役として随行を賜った阿部勇雄氏には厚くお礼を申し上げるとともに、この調査のために数々の貴重な文化財資料をお見せいただいた各位にも、末尾ではありますが、記して感謝の意を表しあげたいと思います。

**【協力者氏名】**（順不同・敬称略）

平塚ツナ（古文書所有）田代仁斗田五〇
阿部栄治（満福寺総代）田代仁斗田三五
平塚基（稲荷神社神主）田代仁斗田八一
阿部功（文書・その他）田代仁斗田二六
菅原滋孝（松盛院住職）田代大泊五五
菅原亮一（蛇田小学校教諭）蛇田字新下浦一三〇—六
津田佐男（大泊行政委員）田代大泊五一
津田米蔵（松盛院総代）田代大泊六四
津田寿（鹿島神社神主）田代大泊二六—一
田代漁業協同組合　田代小学校
木村金一・阿部岩蔵・阿部総一郎
本田又一・鈴木慶雄・阿部輝雄
鈴木勲・毛利孝二・市場昇
（以上九名仁斗田貝塚土地所有者）

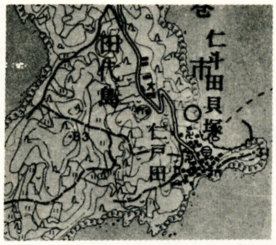
# 仁斗田貝塚の概観

前文化財保護委員　楠本政助

昭和八年、故遠藤源七氏により初調査のおこなわれた仁斗田貝塚は、其の後発掘の継続されることもなく現在に至り、遺跡がほぼ完全に近い状態で残されている本邦唯一の貴重な岩礁性大貝塚である。当貝塚の出土品はすでに多くの文献によって広く学界に紹介され、遺跡及び遺物の重要性は高く評価されていた。幸いにも今回関係諸氏の強い要望によって現地視察がおこなわれ、その概要を述べることになったが、紙面の都合もあり遺物個々についての考察は省略した。なお本貝塚についての詳細は宮城県石巻工業高等学校創立十周年記念論集（昭四八）に詳述したので参照されたい。

## 一、位置及び推定面積

遺跡は仁斗田の北側標高約十五メートルの台地で、平坦部（約一三八六平方メートル）と南側に急傾斜する三つの段畠（約九五〇平方メートル）が主体だが、遺跡の範囲は約三二〇〇平方メートルに達すると推定されている。




× × ×

## 二、出土遺物

### 1　土　器

現在までに確認された最も古い型式は縄文前期初頭上川名式で、後続型式も発見されているが、量的に少なく、中期大木7A式以後から後期堀之内II式までが圧倒的に多い。

### 2　石器・土製品

石器および土製品はそれ程多く発見されていないが、理由は露出している部分が少ないのと、主体部のほとんどが一～一・五メートルに近い厚い表土でおおわれているためと考えられる。

| 遺物の種類 | 個数 |
|---|---|
| 磨製石斧 | 5 |
| 石ノミ | 1 |
| 石小刀 | 4 |
| 石錐 | 2 |
| 石鏃 | 17 |
| 石槍 | 1 |
| 石棒 | 1 |
| 有孔石製品 | 5 |
| 有孔土製品 | 1 |
| 円盤状土・石製品 | 9 |

### 3　骨角器

骨角器中漁具の占める割合は大きく、なかでも釣針はすでに二一点（完形二、未完成品二）が確認できた。形式は次の型とおりである。

| 型式 | 個数 |
|---|---|
| 単式釣針 | 一六 |
| 錨状釣針 | 二 |
| 不明 | 一 |

縄文中期後半から後期初頭にかけては内湾の貝塚でも釣針の発見される率が急に高くなる。

しかし、両者を比較すると、テクニックの面ではかなりの差があり、たとえば軸頭の形状や腰のカーブ、または逆棘の有無などいくらも挙げられるが、一番大きい点は軸や軸頭部のサイズの相違であろう。

ほぼ同時期の内湾性大貝塚であった南境貝塚の資料と対比した平均値は、およそ次のとおりであった。

| | 南境貝塚 | 仁斗田貝塚 |
|---|---|---|
| 軸径（CM） | 0・52 | 0・79 |
| 軸頭径（CM） | 0・43 | 0・51 |
| 計測数 | 10 | 8 |

（全長六センチメートル以上の比較的大型に属する釣針のみ）

軸径及び軸頭径（この場合クビレの部分を指す）の大きいことは大形の獲物に対して強力かつ有効であるわけで、岩礁性貝塚の釣針の特徴の一つであろう。

**〔刺突具類〕**

中期以後はヤスの類も増加し刺突漁は盛んにおこなわれていたが、仁斗田貝塚の既出土資料中にはあきらかにそれと断定できるものはまだ確認できなかった。しかし当貝塚の構成された時期に至ると単純な形態を示すヤスは当然あるべきで単に未発見であるに過ぎない。

**●古式離頭銛**

石巻湾内で開発された強力な漁具であるところの古式離頭銛は、仁斗田貝塚でもすでに四例が確認されている（II類のみ）。うち一例は初現期の大木8B式に伴出したもので、当貝塚の縄文人が漁撈具に対していかに進取性に富んでいたかがわかる。

**●閉窩式離頭銛**

無尾型に属する閉窩式離頭銛が大木8B式に一例発見されている。同様の例は東北太平洋岸から関東地方の一部まで極めて稀に散見できるが、この型式の銛が後・晩期に盛行する燕尾式離頭銛の古い型態ではないかとの説が最近提唱されている。

**〔その他の骨角器〕**

以上のほかに鯨骨製の骨刀、へら状骨製品、各種尖頭器、鳥管骨製の骨針などあるが、いずれも内湾部のものと大差ない。またカモンダカラと推定されるタカラ貝が一点発見されているが、自然遺物であるかもしれない。

## 三、自然遺物

次に当貝塚で発見された動物遺骸について概略を述べよう。

貝の種類はほとんどが巻貝を主とした岩礁性の貝で占められていて、内湾との相違は著じるしい。その他魚骨、鳥骨、海獣骨が多いことも特徴の一つでシカの骨は少ない。

**●人　骨**

左下顎骨一点が出土していて、推定年令三〇～四〇才の男性である。$P_1$、$P_2$および大臼歯が遺存し、歯冠部が平坦に摩耗しているので鉗子状咬合であったと考えられる。

〔計　測〕

下顎枝の角度　一一〇度

下顎角から下顎頭までの高さ　六・二センチメートル

下顎頭と筋突起間の最大幅　四・七センチメートル

歯槽弓（$M_2$）から下顎底までの高さ　二・七五センチメートル

歯槽弓（$M_2$）から下顎底までの高さ　一・七五センチメートル

＝外　面＝

＝最大厚＝

**●貝　類**

カキ、サザエ、アワビ、アカガイ、ツメタガイ、アカニシ、レイシ、イガイ、ユキノカサ科、ニシキウズ科、エゾバイ科。

**●魚骨・海獣骨**

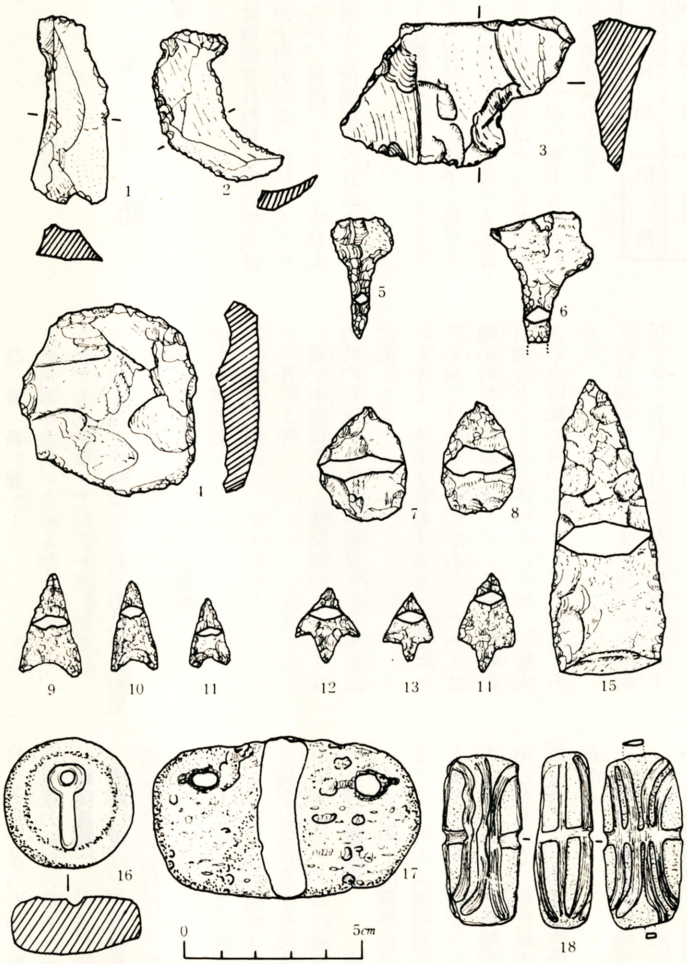
マグロ、マダイ、スズキ、サバ、カワハギ、ソイ、エイ、ウミガメ、アシカ、クジラの類。

**●獣骨・鳥骨**

獣骨は、シカ、イヌ、の二種が認められる。鳥骨は多数認められるが、種名の判明調査が未了であるため記載できない。

## ◆仁斗田貝塚出土遺物実測図

仁斗田貝塚出土遺物




〔図版説明〕

●①～④　石小刀

●⑤・⑥　石錐

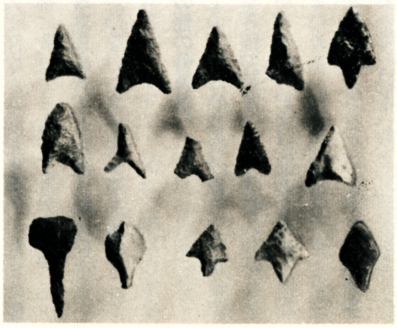
●⑦～⑭　石鏃

●⑮　石槍

●⑯・⑰　石製垂飾品

●⑱　土製品

◆仁斗田貝塚出土石鏃



1 稲荷神社
2 平塚ツナ家文書
3 満福寺
4 仁斗田貝塚
5 愛宕神社
6 十三塚
7 鹿島神社
8 松盛院

# 金石文・経塚について

文化財保護委員　佐藤雄一

## 一、板碑

田代小学校裏手の高台にある愛宕神社の境内にある。田代島において年代の刻まれている板碑は、この一基だけである。書体は、流麗で堂々としている。偈文はなく、単に「右志者為聖霊也」とのみあり、随分と簡略化されている。牡鹿半島にも女川湾ぞい、太平洋側とともに板碑は確認されているので、牡鹿半島に近い田代島に「延元三年」の板碑があっても不思議ではない。石材は粘板岩(稲井石)であるので、石巻近辺から運ばれてきたのだろう。製作地は田代島か、それとも石巻近辺かという問題もあろうが、それは石巻近辺とみるのが妥当だろう。

〔板碑〕

(A) 延元三(一三三八)年八月日
高さ～93cm　幅～30cm　厚さ～9cm
種子ぁ　粘板岩

この碑は、現在松盛院山門脇にあるが以前は開山の設年が大永三(一五二三)年という玉泉庵なる庵寺の跡にあったものを何時の頃か、現在の場所に移したとつたえられている。

玉泉庵の古さといい、種子の彫りかたといい、種子だけであるが、中世のものとみて間違いないようである。

☆　☆　☆

## 大泊・松盛院山門側

「願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆共成仏道」という偈文と、種子ぁがあるだけで、年代の記載はない。この碑は大泊海岸の砂中より堀り出されたものという。その後、松盛院に移されたと伝えられている。

(B) 無年号
高さ～76cm　幅～11cm　厚さ～11cm
種子ぁ　粘板岩

（C）無年号
高さ～66cm　幅～16cm　厚さ～13cm
種子ぁ　粘板岩

## 二、石　仏

田代島石仏の種類は地蔵一種といってよく、この他に馬頭観音の文字塔があるだけである。

地蔵の石材は、写真①②③にみられるような凝灰岩であり、写真④⑤のような粘板岩は少ない。そして、粘板岩のものが時代も新しいようである。凝灰岩のものはその輪郭を残すだけで、くわしい様子をさぐることはできないが、独特のやわらかさがあり、他にみられない優雅さをたたえている。

①満福寺境内

②満福寺境内

③満福寺境内

④満福寺境内

⑤満福寺境内

## 三、馬頭観音文字塔

仁斗田満福寺境内に二基の馬頭観音文字塔がある。天保五年、六年の造立である。馬頭観音は、一般には馬を使用する人々によって信仰されたと考えられているようであるが、それは江戸中期以後のことである。馬頭観音は弥陀の変身したもので、慈悲で救い難い衆生のためには仏が怒りの姿をもって救いあげようとしたものであるという。変化観音の一つである。満福寺の文字塔は、天保五、六年の造立であるので、おそらく馬を使用した人々によって造立された民間信仰の現われであると考えられるが、馬とはあまり関係のない田代島のどのような人達の造立によるものであろうか。それとも古代における馬頭観音の功徳を知っての造立であろうか。

## 四、題　目　碑

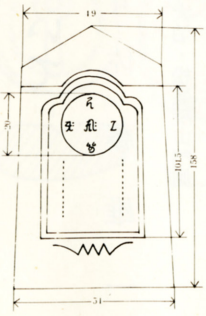
仁斗田船着場の左側台地に太平洋に向かって高さ二米九〇糎ばかりの題目碑が立っている。安政四年の造立で、世話人は相沢屋金右衛門である。「一天四海皆帰妙法海上安全天下泰平国土安穏大漁満作」とあるによって、造立の趣旨は明らかである。田代島に日蓮宗信仰のあとをさぐってみても、全くその傾向はない。ただ、流人として田代島に送られ、寛文四（一六六四）年に没したといわれる日東和尚が、日蓮宗を信仰した人といわれている。

しかし、この題目碑は日東和尚とは直接のかかわりあいはないと思う。石材は粘板岩であり、高さは地上二米九〇糎、幅は一米二十七糎、厚さ、二十五糎という巨石は船便の発達した江戸末期に石巻地方において作成せられ、田代島に運ばれてきたものであろう。世話人の相沢屋金右衛門の子孫は現存するという。

## 五、十　三　塚

田代中裏手から大泊方向に並んでおり現在六個を確認できる。中学校裏手のものが保存もよく、塚上に図のような碑がたっている。以前、この塚中から一字一石が出土したといわれ、経塚に類するものかもしれない。塚は長辺七・七米、短辺六米の方形で高さ一・六米である。

●十三塚上の石碑（単位センチ）



# 平塚八太夫文書について

文化財保護委員　木村敏郎

平塚八太夫家は代々与治右衛門を名乗っていたが、当主（十年前に死去、現在令夫人のみ淋しく暮している）の六代前ごろから肥料や海産物の仲買いをしていたという。

八太夫は与治右衛門の先妻の子で、生後間もなく母を失った。少年時代から水夫として働き、いつしか那珂湊に出て水戸藩御用達商人大内五郎右衛門の船に乗り組むようになった。やがて腕のいい船頭として認められ、五郎右衛門の右腕として働くようになった。

大内五郎右衛門が全財産を投げ出して親船三隻に雑貨を満載し、松前を往復して千五百両の巨利をせしめた折、八太夫はその働きにより親船一隻と三百両を分与してもらい、自ら蝦夷地貿易に乗り出すこととなった。八太夫三十余才の時のことである。

天保九年（一八三八）かくして得宝丸を持船とした八太夫は、船頭金太夫と共に事業を拡大、北海に活躍することとなった。

前後して黒船が来航して国内に危機感がみなぎり、北辺がさわがしくなると、幕府は、安政二年（一八五五）二月蝦夷地を直轄地とし、さらに四月仙台藩に対して東蝦夷地東部（ユウフツ・ネムロ・エトロフ・クナシリ）の警備を命じた。仙台藩は財政難の折柄、東蝦夷地一帯を領地として交付されんことを願い出ていたが、安政六年（一八五九）幕府から許可されて蝦夷地東半を所領とすることとなった。

財政難にあえぐ仙台藩は、蝦夷地経営と開発に当って商人の経済力を利用したのは当然であり、商人もまた利権を得て巨利を求めたに相違ない。

得宝丸八太夫も、安政二年早くも箱館に進物をして蝦夷地貿易の地歩を固め、海運丸等藩の船をもあづかって巨額の運上金を献上した一方で、安政五年には浜屋を称するゆるぎない大商人となった。

八太夫は出身地田代島に本拠を構え、ここを中継地として蝦夷地と那珂湊を往復した。

銭屋五兵衛を生んだ加賀藩、仙台藩、水戸藩に代表される大藩は、その財政の逼迫から幕末には密貿易をバックアップして隠し財源としていたことも十分に考えられる。田代島は、仙台藩の与望を担った八太夫の貿易の拠点であったことと考えあわせ、文字通り海と商いに生命を張った男意気が感じられておもしろい。

文久二年（一八六二）実力者八太夫は四人扶持の士分として、仙台藩の所遇を受け平塚八太夫を名乗るようになった。

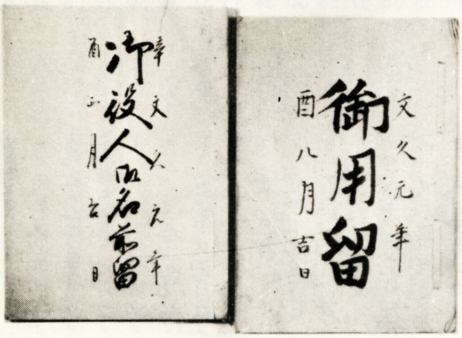
八太夫は慶応二年（一八六六年）那珂湊に客死して六十余才の劇的な生涯を閉じた。

明治四十二年田代島仁斗田大火災のため、八太夫の屋敷も土蔵一つを残して消失した。ここに紹介するのは幸いにして火災を免れた八太夫文書の一部である。数多くの文書は、平塚八太夫の偉大な足跡を物語っているばかりでなく、幕末の蝦夷地貿易、海運の研究に資する貴重な資料であり、仙台藩の経済の要津都市石巻を知る財産である。

八太夫の死後、時代は激動して明治を迎え、その子善三郎の代になると、蓄積した資本を投入して四挺大網をはじめ、田代島漁業の振興におおいに貢献している。

＊　＊　＊

八太夫活躍のロマンは、先に太斎淳先生が、市報（昭41・11・1号「那珂湊覚書」）や石巻日日新聞（昭41・11・3号「偶然でない姉妹都市縁結び――藩政時代からの深い御縁」）紙上で述べておられるので紹介しておきたい。




●平塚ツナ家文書

●廻船手形（表紙写真の裏面）

# 田代浜平塚家文書目録

〔仁斗田／平塚ツナ氏所蔵〕

1 (一八二一) 文政四年巳ノ八月吉日　御分領中御郡方御高付書附
2 (一八三五) 天保六年未の二月　松前蝦夷地場所付　平塚屋東吉
3 (一八三八) 天保九年戌ノ三月改メ　得宝丸船尺材木針尺??細工数惣調控
4 (一八四五) 弘化二年巳ノ六月改メ　松前箱館附船勘定控　得宝丸八太夫
5 (一八四六?) 〃十三年午ノ二月改メ　大工日用人数働分方控　〃　〃
6 (一八四九) 嘉永二年酉六月改メ　年中小夫諸入用書控
7 (一八五〇) 〃三年戌ノ正月改メ　金銀出入控　得宝丸八太夫
8 〃　九月改メ　宝来丸金太夫殿勘定出入書控
9 〃三年、四年、五年、六年　得宝丸八太夫
10 (一八五三) 〃六年丑九月　宝来丸分亥ノ八月戌九月改メ得宝丸分エトロフ場所荷物積入高勘定書控
11 (一八五四) 〃七年寅ノ正月改メ　金銭出入荷物積入控帳　宝来丸金太夫
12 嘉永□年八月　船中勘定出入帳
13 (一八五五) 安政二年巳三月日　手控帳
14 〃　卯四月　宝来丸雑用覚帳
15 〃　七月　箱館進物控
16 〃　三年辰三月日　金銀受払差引帳
17 〃　二年巳三月日　海運丸道具積入　平吉
18 卯　十一月　万売買仕切覚帳
19 (一八五六) 安政三年辰正月十一日　金銀請取帳　〈三
20 〃　六月吉日　売買仕切帳　得宝丸金太夫
21 〃　辰八月日　小取替控帳　三原屋定兵衛
22 〃　〃三月吉日　宝来丸金太夫様
23 〃　〃六月吉日　新造誠調并金銀出入帳　宝来丸金太夫
24 〃　〃八月日　金銀受払残金預り帳　金太夫
25 〃　〃八月　新造小モノ附込控帳　宝来丸金太夫様
26 安政三年辰十月　三原屋定兵衛
27 (一八五七) 〃　四年辰ノ正月改メ　大阪ニテ船入用并箱館迄下リ雑用
28 〃　巳ノ正月改メ　宝来丸金太夫
29 〃　六月改メ　ユウフツ秋味登処々進物勘定帳　八太夫
30 〃　八月改メ
31 〃　九月改メ
32 (一八五八) 〃　五年午ノ正月改メ
33 〃　〃　〃
34 〃　二月
35 〃　五午年七月吉日
36 〃　五年午二月吉日
37 〃　〃三月改メ
38 (一八五九) 〃　六年巳未正月吉日
39 〃　未三月改メ
40 〃　六巳未年六月吉日
41 〃　六未十二月吉日
42 未九月
43 (一八六〇) 安政七年二月二十七日
44 〃　壬申年三月吉日
45 〃　〃　〃
46 〃　庚申壬三月二十七日
47 〃　庚申年
48 (一八六〇) 万延元年申正月改メ
49 〃　六月
50 〃　六月十九日
51 〃　〃　〃
52 〃　六月吉日
53 〃　〃　〃
54 (一八六〇) 万延元年七月四日
55 〃　申七月吉日
56 〃　申
57 〃庚申年霜月吉日より改メ年々御年貢上納控帳　浜屋八太夫代善三郎
58 (一八六一) 辛酉万延二年酉正月吉日　金銀出入控
59 万延二年丙三月吉日　諸材木御通
船道具并鉄物粮米帳　宝来丸
江戸買入物中ノ湊勘定書控　得宝丸八太夫
金銀出入控
エトロフ船中勘定控　得宝丸分
海運丸積来荷物渡方出入勘定書控
妙徳丸荷物積入書昆布買入調書控得宝丸次助
金銀出入控
江戸中湊勘定諸用控
万延元年申ノ三月改メ諸品買入控　浜屋八太夫
箱館進物控
下物荷物控帳
妙徳丸勘定書控
諸色控
江戸買入注文取立控売買金物差引□□
箱館進物控　浜屋八太夫
大御印取立金控　〈三店
子モロシベツ下リ荷物積入調子
貧民施粮帳　浜屋八太夫代善三郎
雑用粮米小遣懸帳　宝来丸金太夫
万売買仕切控帳　〃　〃
四間半七間板蔵壱間木梶書附賞帳
両村中貧民助米払方帳浜屋八太夫代善三郎
得宝丸船材勘定書控　浜屋八太夫
宝来丸入用自分払帳　金太夫
宝来丸祝儀覚帳
宝来丸造船一紙目録帳　宝来丸金太夫
当座御用立控帳　浜屋八太夫
箱館進物控　田代浜善兵衛
宝来丸祝儀覚帳
金子受払目録牒　宝来丸
進物遣方控

| | | | |
|---|---|---|---|
| 60 | 辛酉文久元年正月吉日 | 御役人御名前留 | |
| 61 | 〃 三月吉日 | 宝来丸作事目録 | |
| 62 | 〃 〃 | 江戸仕入目録留 | |
| 63 | 〃 〃 | 為上御し入用控 | |
| 64 | 〃 〃 | 釘請取通控 | |
| 65 | 文久元年四月吉日 | 諸造用御通 | |
| 66 | 〃 酉八月吉日 | 御用留 | |
| 67 | 辛酉文久元年九月吉日 | 金銀受払帳 | 宝来丸 |
| 68 | 〃 十月吉日 | エトロフ登走上下分売買仕切帳 | |
| 69 | 〃 九月吉日 | 宝来丸金太夫 | |
| 70 | (一八六二) 文久二壬戌年正月四日 | 売買仕切帳 | 宝来丸 |
| 71 | 〃 戌二月吉日 | 御用達御祝儀至来控 | 平塚八太夫 |
| 72 | 〃 戌二月改メ | 海運丸秋味勘定幷指引控帳 | |
| 73 | 壬文久二年 | 江戸買入仕切諸品控 | |
| 74 | 壬戌文久二年八月改メ | 箱館進物控 | 浜屋八太夫 |
| 75 | 〃 〃 | 現金幷貸方請取控帳 | |
| 76 | (一八六三) 文久三年亥正月改メ | 大印取立金控帳 | 〈三店 |
| 77 | 〃 〃 | 得宝丸造船入用諸色控帳 | |
| 78 | 〃 正月吉日 | 得宝丸船道具買入造船惣掛控 | |
| 79 | 〃 二月吉日 | 〈三店出入金控 | |
| 80 | 〃 八月改メ | 海運丸戊年夏登指引目録 | |
| 81 | 〃 十月改メ | 宝来丸権限丸勘定書控 | |
| 82 | 〃 十月改メ | 権限丸売買仕切勘定書控 | |
| 83 | (一八六四) 文久四年子二月改メ | 書状出入控 | |
| 84 | 〃 二月朔月改メ | 江戸買入品荷物諸用帳 | |
| | | 秋味生鮪庁前十鰯新鱈積入調子船中勘定作 | |
| | | 太郎殿出入勘定差引控 | |
| 85 | 甲子元治元年五月吉日 | 箱館進物帳 | |
| 86 | 元治元年子七月改メ | 権限丸エトロフ切囲売代金控 | |
| 87 | 〃 十一月改メ | 大御印貸方取立帳 | |
| 88 | (一八六五) 元治二年丑正月改メ | 江戸買入諸用控 | |
| 89 | 〃 乙丑年正月吉日 | 大網元入帳 | 浜屋善三郎 |
| 90 | 慶応元年丑月五月改メ | 三光丸出入惣勘定控 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 91 | 慶応元年丑八月 | 家作物勘定調子控帳 | 大黒町〈三 |
| 92 | (一八六六) 慶応二丙寅年正月吉祥日 | 永々御免苗字帯刀麻上下祝儀帳平塚八太夫 | |
| 93 | 〃 年二月 | 江戸買物入用控 | |
| 94 | 〃 寅四月吉日 | 新□船中勘定帳 | |
| 95 | 〃 寅年九月三日 | 道中小遣帳 | 仙台田代浜 浜屋善三郎 |
| 96 | 〃 丙寅九月十七日 | 八太夫殿病気中遣控 | 浜屋善三郎 |
| 97 | 〃 二十二日調子 | 八太夫殿銚子ニテ病気中有金調子幷諸入用 | |
| | | 控帳 | 浜屋善三郎 |
| 98 | 〃 十月 | 当座諸用手控帳 | 浜屋善三郎 |
| 99 | 〃 寅年十二月二十七日 | 猟虎皮幷有品調子控 | 浜屋善三郎様 時蔵 |
| 100 | (一八六七) 〃 三年卯正月吉日 | 万日記 | |
| 101 | 〃 卯二月改メ | 勘定出入控帳 | |
| 102 | 〃 〃 | 三幸丸諸道具入方代金控 | |
| 103 | 〃 卯年二月吉日 | 船中勘定控 | 浜屋善三郎 |
| 104 | 〃 卯ノ二月 | 江戸買物控 | 〃 |
| 105 | 〃 卯五月吉日 | 金銀出入調子帳 | 〃 |
| 106 | 〃 卯九月吉日 | 得宝丸エトロフ下り入用控 | 〃 |
| 107 | 〃 卯年十一月 | 得悦丸荷物積入控帳 | 〃 |
| 108 | (一八七〇) 明治三年二月四日 | 貧民施米帳 | 浜屋善三郎代竹治郎 |
| 109 | 〃 庚午年九月 | 根室行土産物品々仕入幷進物控 | |
| 110 | (一八七〇) 明治三庚午年閏十月吉日 | 根室国野付郡秋味積入控 | 浜屋善三郎 |
| 111 | 〃 十月吉日 | 根室国秋味売買帳 | 〃 |
| 112 | (一八七一) 〃 四未年四月 | 秋味売買勘定帳 吉田庄八様 | |
| 113 | 〃 九月吉日 | 場所行品々仕入元帳 | 浜屋善三郎 |
| 114 | (一八八四) 〃 十七年甲申歳一月 | 四挺大網聯合定納証扣 | |
| 115 | 〃 〃 | 聯合大網営業規則 | 議長平塚治左衛門 |
| 116 | (一八八五) 〃 十八年 | 当村中大網勘定総一紙不足金借用約束証 | |
| 117 | (一八八八) 〃 二十一年三月 | 明治二十年大網四ケ所網子組立調査帳 | |
| | | 平塚治左衛門扣 | |
| 118 | (一八九七) 〃三十年改正 | 四挺大網株式名簿 | 平塚八太夫 |
| 119 | (一八六〇) 万延元年庚申正月十八日 | 北亜米利加合衆国ワシントン都府江渡来之 | |
| | | 日記 | 通弁御用名村五八郎記 |
| 120 | (不明) | 船手通例差廻候而モ心得向被見込故ニ奉申上候 | |

121

その他、書状、借用証文、仕切、等多数の所蔵あり。

## 平塚市郎左衛門家文書〔平塚基氏宅〕

1（一八四二）天保十三年寅之年　万福寺旧記録写
2（一八九六）明治二十九年十月改メ　社主平塚公ヨリ代々御譲り帳明神社開山録
3　当代平塚市右衛門　稲荷神社霊代ノ事
4（一九一〇）明治四十三年六月二十八日記　再調整村社々人性名記録簿　正社守平塚亀蔵所持

牡鹿郡田代浜百姓蝦夷地産物取開方御用達（不明）

牡鹿郡田代浜稲荷大明神旧記之事」一冊、「明神社開山録　明治二十九年十月改め」一冊、「稲荷神社霊代の事」一冊、「再調整　村社及人性名記録簿」一冊。

**▼鹿島神社**

所在地　田代島大泊浜
祭　神　武甕槌神
祭　礼　十月九日
縁　起　享和元年（一八〇一）再興し、鐘楼、鏡を奉納したと伝えるだけで、不明。享和元年銘撞鏡堂棟礼、安政四年銘絵馬などがある。

**▼愛宕神社**

所在地　田代島
祭　神　不明
祭　礼　不明
縁　起　島の最も高い場所にある小祠、境内に延元三年（一三三八）年銘板碑が一基ある。猫神社ともいう。

**【仏　閣】**

**▼万　福　寺**

所在地　田代島仁斗田浜
山　号　高森山
宗　派　曹洞宗
（本寺は仙台市北山輪五寺）
本　尊　地蔵尊（座像）牡鹿郡誌では、釈迦牟尼如来とする。
住　職　松盛院住職兼務
開　山　松殿春長大和尚
由　来　もと天台宗満蔵寺と称し、越後国竹内村高安寺の末寺。開基開山は不明だが、明徳元年（一三九〇）以前の開山で、万蔵高安寿峰和尚にかかる模様。明徳元年（または二年）、南北朝争乱の時、賊のため堂宇災上、住職ら三名が焼死したと伝える。藩政時代、村民によって再興され、青葉城下北山輪王寺十四世松殿春長和尚が開山、寺号を万福寺と改め、曹洞宗となった。開山年代は牡鹿郡誌によると延宝三年八月である。寛政年中火災にあい、また明治三年八月廃寺の動きがあった。歴代住職名は不明。十三代は文化元年より天保十三年まで、十五代は三ケ年在住した。秘仏として阿弥陀三尊脇仏がある。関係文書「満福寺旧記録写」明治二十年。

**▼松　盛　院**

所在地　田代島大泊浜
山　号　大泊山
宗　派　曹洞宗
本　尊　聖観音（座像）
開　山　一翁宗岳和尚
由　来　大泊浜津田家先祖が将来した、持仏を玉泉庵に奉祀し、後一寺を建てて松盛院と号した。開山は石巻梅渓寺五世開山年代は牡鹿郡誌によると、天文十四年八月である。寺仏、歴代住職名は、不明。
本尊聖観音座像に胎内銘がある。また境内に中世板碑二基がある。

**【廃　寺】**

**▼地　蔵　院**

田代島仁斗田浜にあったと伝える。嘉永元年（一一〇六）平塚掃部之助の将来した仁斗田仏（地蔵尊）を本尊としたと伝える。

**▼田　代　寺**

田代島仁斗田浜にあった。鶏浜山田代寺という。稲荷神社関係文書によると、寛政年間九月八日稲荷神社神輿を一時この寺に移すという。

# 田代島の神社・仏閣

前文化財保護委員　三　宅　宗　議

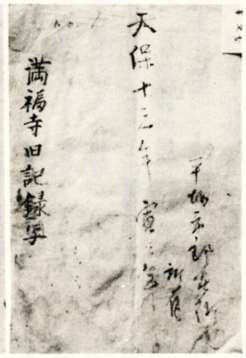
田代島における神社、仏閣の調査については、縁起を中心に行ったが、一部、彫刻、建築に及んだものもあった。概要は次の通りであるが、時間的な制約から充分な調査に至らなかった点もあり、報告は項目ごとに書記するにとどめた。

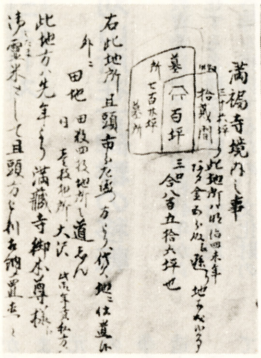
**【神　社】**

**▼稲荷神社**

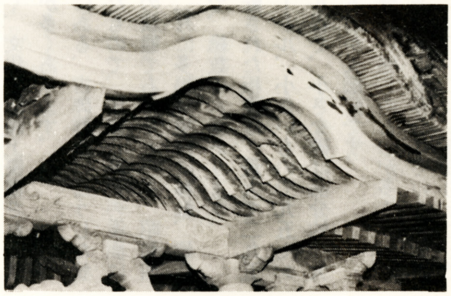
所在地　田代島仁斗田浜
祭　神　稲荷大明神
（牡鹿郡誌では倉稲魂命）
祭　礼　十月九日
縁　起　平塚家文書によると、嘉承元年（一一〇六）、平塚掃部之助が京都伏見稲荷より分霊し祭祀した。牡鹿郡誌では鹿長元年（一五九六）九月九日島民の勧請とするが出典不明。寛政年中（一七八九～一八〇一）本宮を建立。拝殿が3間半で銅板葺であり、鐘堂などもあったが、全て焼失。享和二年（一八〇二）再興、これも明治四二年十一月二〇日、仁斗田浜大火災の時類焼した。現社殿は大正四年鮎川浜〝天皇様〟のものを貰い受けたもの。奥の院は石巻市門脇の船魂神社旧社殿を譲り受けたもの。この奥の院は仙台藩楽山公の建築と伝え、桃山風の様式を残す。享和二年、奉納絵馬など画額数百枚を焼失。嘉永三年又は元治二年京都伏見より納めた神額は明治四二年焼失。第二次大戦中、正徳元年銘の鐘を供出。現存の三基の神輿の内一基は正保年中の作成と伝える。関係文書「明治四二年旧九月九日以降、村社稲荷神社記録簿」一冊、「稲荷明神旧記

◀聖観音座像（松盛院）

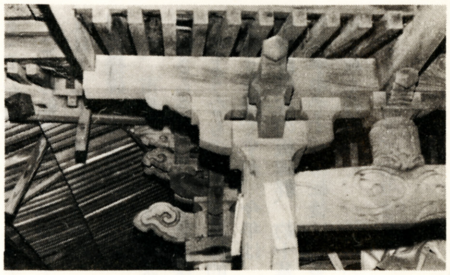




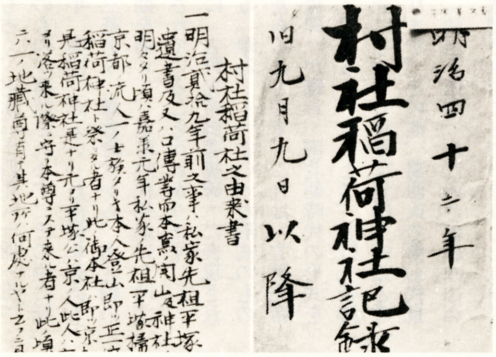
◀満福寺旧記録写



◀稲荷神社奥の院建築



◀同　上

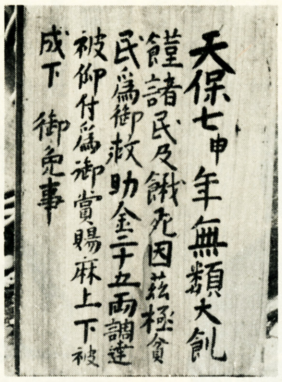


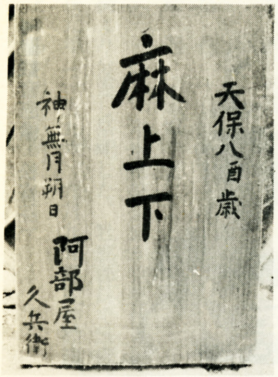
◀稲荷神社関係文書

◀満福寺秘仏

◀満福寺念仏講

◀鹿島神社鐘銘




◀阿部功氏所蔵／麻上下箱蓋

## 文化財ニュース

# 湊草刈山所在古碑群の移転

石巻市教育委員会では、昭和47年から市内に存在する各種文化財の、所在地や数量、内容等を把握するため、文化財の分布調査を行ってきていますが、そのうちで中世の石巻の歴史を研究するうえに非常に貴重な資料となる板碑が、市内には、たくさん存在することが確認されました。まだこれら板碑の個々について精査する段階までは至っていませんが、現在のところ、推定二百基以上の板碑が市内に存在するだろうと思われます。

これらの板碑の内には、管理者や、その所属権が不明確なため、無管理状態のものが多く、文化財保護上優慮される状態のものが多くあります。

草刈山にある、古碑群も、こうした状態にあったもので、民家の裏手の崖面に倒壊寸前の状態であったものを、昭和四十七年十二月に多福院境内に移転、建立したもので、総数十六基あります。

この移転された板碑は、最大で二九五センチメートル、小さいもので九五センチメートル程で、小さな碑は部分的に欠損しているのが大部分です。

一般に分厚い感じのものが多く、これは、現在多福院に保存されている小型の板碑とくらべてすこぶる特徴的なことです。年代的には、永仁二年（一二九三）が最も古く、応永二十四年（一四一七）までのものが確認されます。その中に延元三年、興国三年といった南朝年号のものが三基あり、鎌倉時代から、南北朝の争乱期を通じて、室町時代初期にかけて造立されていることがわかります。

更に「吉野先帝御菩提碑」に表現されている「奉為……」といった形式のものが四基あることです。これは「吉野先帝御菩提碑」が鎌倉、南北朝時代の形式をふまえているということで、吉野先帝碑の研究にとっても貴重な資料であると考えられます。その他、葛西氏の第七代良清公（法名―蓮阿）のための板碑がこの中に確認されたことで、そうした点から移転した草刈山古碑群が、中世史研究の上で非常に貴重な内容をもったものであることが確認されたわけです。

この移転事業は、昭和四十七年十二月五日～二十五日まで行われ、「吉野先帝御菩提碑」の東隣りに建立、整備されました。市教委では、今後年次計画で、危険にさらされたり、早急に保護を必要とするようなものから、具体的に保護施策を行う計画ですが、今年は、稲井水沼安楽寺跡所在の板碑群、約十基の移転に現在着手中です。移転後は、多福院同様、説明板を設置して、一般への公開をはかりたいと考えております。

◀移転前の状況

◀移転中の状況

▼移転後整備された板碑

表紙題字は近江義雄教育長

創刊号（年2回発行）
昭和四十九年一月一日発行
■発行／石巻市教育委員会
■監修／石巻市文化財保護委員会
■印刷／（株）三友社